

地球サミット後の問題点を探る

小原秀雄＋岡島成行

司会・山本修一



小原秀雄氏

地球サミットの意義及び問題点

山本 本年（一九九二）六月三日から十四日の間に地球サミット（環境と開発に関する国連会議）が行われました。本年はストックホルムでの国連人間環境会議が一九七二年に行われてちょうど二十年、またコロンブスの新大陸発見から五百年という年にも当たります。世界的な情勢としても冷戦が終結して、世界の問題というのは環境問

題に集約されてくると考えられます。現在の共産圏の崩壊の問題、また科学技術の在り方に対する問題提起等々、このようなことから考えてみますと、現在というのは二十一世紀に向けて一つの岐路に立っていると考えられると思います。

そこで今日はこれまでの人類の文明に対する反省も含めて、地球サミット後の世界を考える場合にどのような視点でこれから考えていったらよいのか、こういった観点でお話していただければと思います。

はじめに地球サミットの総括と言いますか、意義と残された問題点をお話していただければと思います。



岡島成行氏

岡島 それでは問題提起の形で地球サミットの意義について最初にお話したいと思います。まず第一に百七十九カ国の代表、なかでも九十四カ国からは大統領や首相が集まったこと、環境を何とかしようというテーマで集まったということが一つの大きな意義です。これは世界的な啓蒙活動になったと思います。それからリオデジャネイロ宣言、アジェンダ21、生物多様性条約と気候変動枠組み条約の四つがまがりなりにも決まったということがもう一つの意義だと思います。

中でも、余り注目されていないのですが、リオ宣言が案外憲法的な役割を果たすようになるという気がしています。



司会・山本修一氏

ます。現在ではたとえばチェコ、スロバキアから煙が出たものがドイツに落ちて、酸性雨になっていくといった場合、交渉の余地がない。お互いに、私は知りませんよ、で済んでしまう。しかしリオ宣言の中で、「地球環境を破壊する行為は反社会的、反人類的、また反地球的な行為である」ということを規定した。このことによって、現実問題として難しいでしょうが、たとえば日本に中国から煙が飛んで来て酸性雨の被害を受けたといった時にクレームをつける事が可能になる。これはまだ拘束力はないのは確かですが、損害賠償まではいなくても、そういうことをしないという約束をしたのに違反したという憲法的な意味が生まれてくる。この意義は大きいと思いますね。

それから全体の意義という点だけ取り上げてみますと、今回の会議を山登りに例えれば、ベースキャンプに集まって、「本当に登ろうか、それともやめようか」と考える会議だった。今回一番大きな意義は、そこで山を昇ることを決めたところにある。つまり、岐路に立った時に環境を守ろうという方に一歩進めることを決めた。

現在の世界は二百何カ国かの国家と国家で成り立っています。その内百七十以上の国家が集まってサインしたというところで、人類の行く道として、環境は大事だということをお前提とした社会づくりに一歩踏み出した。そこに大きな意義がある。

ただし問題はどのルートを通っていくか、というような「登り方」について決めていないこと。すなわちどの国からお金をいくら集めて、そのお金をどのように分配するかとかいう点等では穴だらけなんです。したがって、登るルートも全く決めなかったというところで評価すればサミットは意味がなかったということになります。しかし、私は登るか登らないかという最大のポイントで登ることを全世界が決めたという点を評価して、大袈裟に言えば歴史的な意味があったと思います。

小原 私は今度は逆にその問題点や残された課題の方をあげてみたいと思います。まず残された課題としては、サステイナブル・デベロップメント（持続的な開発）と言う場合のサステイナビリティというのは一体何か、という問題が一つ。それから私の専門の方から言えば、

たとえばバイオダイバステイ（生物の多様性）と言った時に、生物の多様性というのは必ずしもバラエティという意味ではないわけで、ダイバステイというのは自然の進化のプロセスというのを保全していかなければいけないという意味で、これは非常に大事なポリシーを言っていると思う。ただそれを具体化する時に、持続的開発とか利用というものと生物の多様性、進化のプロセスを守っていくというのと矛盾するところがある。それをどういうふうに具体化するか。しかも国家利益、特に開発途上国の場合指導者層の国家利益という考え方というものにどうしてもなっています。したがって、開発途上国のすべての人たちの問題も絡めてどういうふうに考えるかという問題というのが一つあると思う。

開発途上国の人たちからすると、とにかく開発はしたいということはある。しかしたとえば日本のような先進国の行なってきた開発というのはするべきではない、とみんな知っている。ただその道が技術的にも科学的にもどういうふうなことになるのかということについて、まだ必ずしも明確に見えていない。どういうふうにするかという

ことは、これは科学技術そのものに問われている非常に大きな問題で、これははっきり言って今までの科学技術では実際には個々の課題は改善できても根源的な環境問題の解決はできない、と欧米の指導的科学家は認識しているところがあるんですが、じゃあその代わりのものはどうかという、必ずしもそこはうまく出ていない。

自然は野生生物を含む生態系から構成されており、その自然を自然のままの進化を保証しながら、どういうふうに利用していくんだという、そのところがはっきり見えていない。ただ課題は残っているけれど、その課題はポジティブな意味がある。つまり地球環境を何とかしなければいけない、ということが前提になってきている。前はそういうものは全く無視した上で使えるだけ使っていく方向と、それを防ごうとする側とがせめぎあっていたんだけれども、今や国際的には少なくとも防ぎながらやろう、というふうに決まってきたという点ではいいと思います。

岡山 遺憾ながら決めたのがちょっと遅い感じなんです。もうちょっと早く決めておかなければならなかつ

た問題を、ようやく今決めたというような気がしないでもない。

小原 そうですね。十年前の時に決めていたらと思いますね。

岡山 だからちよつと間に合うかな、という不安感が残りますね。よほど頑張らなければいけないんですが、我が国の政府の対応を見ていると、基本的には本気じゃないですね。ここがまだちよつと心配なところですね。

持続的な開発

山本 そういたしますと、まず今回の会議の最大の意義は、とにかく世界が環境を考えることで出発したというところにある。そして、二十年前の国連環境会議の場合、環境だけを取り上げたのに対して、開発というものを入れなければならぬ。つまり途上国の問題点というのをあげれば、どうしても開発という点も加味しなければいけない、という形で問題が出てきた。そこでまず問題になるのは、持続的な開発とは何か、そして次に問題になるのは実際先進国の側でどの程度本気なのか、ある

いは先進国の勝手な言い分である、という事も考える必要があると思います。

岡山 サステイナブル・ディベロップメントというのは、ディベロップメント・ウィズアウト・ディストラクション、つまり「破壊なき開発」という考えが基本にあるわけです。この「破壊なき開発」が開発途上国でどうしても必要だという論は南から出てきた。それにプラスして、北も安定した経済成長が必要でしょう。従って、北と南を両方合わせて破壊なき開発を広くとらえて、安定的な開発ということに変えたんですね。

ただ現実には、今おっしゃったように、サステイナブル・ディベロップメントという言葉だけでなく、全ての破壊は北が勝手にやっているわけです。資源の使い方にしても、炭酸ガスの排出量にしても、地球を壊しているのはやはりほとんど北ですよ。北の我々は車を持って、美味しいものを食べているけれど、そのお金でバン格拉の子は何人学校へ行けるかという、そういう状況を我々は考えなければならぬ。だからそこは南の方から見るとそのサステイナブル・ディベロップメントという言葉だ

け先行するのではなくて、環境全てにわたって今言われた通り先進国の責任をもっと明らかにすべきだと思うんです。

小原 私が少なくとも感じていることの一つは、サステイナブルと言った時に、日本と、まあ開発途上国の非常に貧しいタンザニアみたいなところは別ですが、たとえば韓国とか中国とか、いわばシンガポールみたいにこれからどんどん発展しようというところの人たちが考えるサステイナブルと、たとえば北欧のブルントラントさんなんかが考えているサステイナブルというのは内容が違うんですね。

今度は日本でサステイナブルと言った時に、日本の政府でも環境庁と通産省では多少違うところがあったりする。ただはつきり共通しているのは、そのサステイナブルということを本気でやるためには、科学技術の在り方とか、産業の構造をそのままにしておいたのでは本場の意味で絶対にサステイナブルにはならない。暫くの間のつじつま合わせはとにかく、何かの形で構造改革とか、変えなければならぬことは確かですね。その変え方が

欲望のコントロール

山本 今回の会議で棚上げにされた先進国の生活の質的改善の問題、また持続的な開発をめぐる先進国の態度の改善といえますか、そのあたりを問題にしたいと思います。今言われたように先進国の経済成長というのは、少なくともプラスにしなければならないというのが前提になっている。けれども環境を守る上で、これはやはり矛盾するんじゃないか、また言われているような持続的な開発を進めるうえで何が課題になるのか。このあたりはどのようにお考えですか。

岡島 地球環境は今のままの経済システムで進んでいったら駄目になりますね。それは明らかで解決のための方策としては、一つは技術力でブレイクスルーする。たとえば我々が新幹線とか飛行機で動かないでも仕事ができるテレビ電話とかファクシミリというようなものが発展すれば、動くエネルギーが大幅減りますね。それからあとは政策ですね、レギュレーションを作って厳しく決めていく。そのどちらかだと思う。その両方に結局絡む

昔みたいに簡単に新しい科学技術とか、社会主義になれば解決すると言うようなものではなくてきてきているから、それをどういうふうにしたらいいのかという点では必ずしも明確じゃないと思うんです。

だから多分国別でも、それから経済の発展の度合いでも、サステイナブルというのはおそらく違ってくる。はつきりしているのは、今のままのイノベーション（技術革新）を日本のようにどんどん続けていくのでは困るということですね。それがこれまでと少し違う点と思うのは、エレクトロニクスになってからの工業の発展の仕方というの、いわゆる軽薄短小になってくるというようなことと、また技術変化の問題でも多少昔とは違っているところも傾向が見えなくなっている。だけどツケの先送りの点もあって、ちよつと樂觀はできない。だからさつき岐路に立っているとおっしゃったように、どっちにこれから本当に転んでいくんだろうかという問題というのは、ものすごく大きな問題のような気がしますけどね。

のは、ちよつと抽象的な言い方になりますが、欲望だと思ふんです。その欲望のコントロールをどうやって可能にするか、そこに行き着くんじゃないかと思うんです。

ただし、欲望のコントロールを強圧的にやるとよくないと思うんですね。そうではなくて、たとえば人間の欲望が環境保全型の方に向くと一番理想なわけです。たとえばアメリカの大学生が一昔前、六〇年代、七〇年代はキャデラックとかムスタングに乗っていくのが恰好よかった、しかし今は自転車の方が恰好いい。またチンチラとかクロテンの毛皮なんてというのが今まで恰好良かったけど、最近はいわゆる人工レザーじゃないと、野蠻だと言われるようになって、毛皮が全く売れなくなった。そういうふうになんかの欲望が環境保全型の方に移行すればよいわけですね。とにかくうまいものを食って、どんどん肥っていくというような生活から、歩いたり、走ったり、自転車を使ってというような生活をすれば可能ではあると思うんですね。

山本 現代社会に生きる人々は、都会生活に疲れて、やはり日曜日には山奥に行きたいというように、心が和

んだり、ホッとするというようなものをどこかで希求している部分があると思うんですね。ところが社会というのはむしろどんどん反対の方向に向かっていく。このような社会的風潮に対して、いかに抵抗して自分が生きていくかというところが今難しいところだと思うんですね。この様な社会的な風潮と人々が求めているものとのギャップをどのように埋めてゆくか。

小原 少し我田引水なんですが、私はなぜ人間学というのをやるかという、たとえば人間自身が今の欲望のコントロールというのが、できる存在なのかどうかというところを動物との比較において検討する。このように人間とはどういう存在かということをやろうというのが、比較生態学から人間学という私の領域なんです。人間というのはいつもアクティブに動いている。考えてみると動物の中でこれほど不思議な存在はない。食べて肥って、余分なエネルギーをつくったものはジョギングで減らすなんていうことは他の動物は絶対にしない。要するに食べるのにもカツカツしか食べられないからですよ。自然というのが大体そういう形になっているのに、

やるように社会の大きな風潮ですよ。

山本 そうしますと、先進国の課題は欲望をいかにコントロールするか、と言うことになりますね。この問題は宗教的な課題でもあります。仏教では「少欲知足」、これは要するに「欲少なくして足るを知る」、と言うことですが、そういった生き方をするのが本来ある人間、あるいは求めるべき人間であると言っています。日本は仏教国ではありますが、しかし、このような生き方ができている人はほとんどいないのが実情だと思われま。従って、仏教国であると言うならばこのような生き方を世界に向かって示してゆくことが要求されると思います。ではそれがどうやったらかういうふうな考え方が定着し、また生き方ができるのかということが、これが一番難しいところなんです。

小原 だから今はテレビだとか、細かく言うといろんな問題があるんだけど、視覚を通して、動物の中でヒトというのは目の発達している動物ですから、視覚を介して入ってくる情報に傾向づけられるということがはつきりあるわけですよ。ところが今のお話は耳から入っ

今まで文化とか文明というのが非常に反自然的なのはなぜなのか。山へ行くという根底のところには、実はそんな食べ過ぎてジョギングをしなくても暮らしていける可能性を動物としては本当はもっているその自然性の現われなんじゃないか、また、そのほうが「自然な」のではないか。そういう疑問をもっていると思うんです。だからそのへんを動物学的な面から追求してみようというのが私の考え方ですね。

ですからもしそういう点で人間にとって、「ナチュラルな」「人間的な」ということは、今まではキャデラックに乗ると言うようなことだったんだけど、実はリュックサック背負って自転車に乗る方なの、というふうになれば、今の話は現実感があるわけですね。果たして人間というのはそういうふうになれるのか。これは教育だとか、精神文明だとか、いろんな問題を含めてなんです。現代文明が問われているということの意味の一つはそういうところにある。人間とはどんな存在なのかというのを、成長する過程などの中でもどうも欲望充足型にすっかり慣れて忘れてしまった。ただ問題はおっし

て来て、文字そして概念でしょう。だから多分視覚によつて開発されるモチベーションの方が、そつちより勝っちゃうということがあるんですね。今欲望を開発するような我々の回りに出来上がってきている雰囲気、その範囲内で、なおかつ今の仏法の教えみたいなのを実現するためにはどうするかという問題というのが、もう一つ出てくるんですね。

私が面白いなと思つたのは、ヨーロッパの知人は、日本人に対して非常に信頼していると言う。なぜかという日本人は仏教徒だから環境を破壊したり、生命を無駄にしたりしないというところで信頼していると言われ、私は実を言うとそんなことは遠い昔の話で、今や駄目なんだ、ということいろいろ説明したんだけど、ヨーロッパの連中はそういう目で日本人を見ている。しかし、実際は日本は結局逆でしょう。

それで私はどうも感覚を通して何かやらないと駄目じゃないか、と思っています。理性を通して、あるいは理屈で説明しても生活態度はなかなか変わらないんですよ。現在のように「もの」が溢れて、「もの」で作り上

げられている世界の中でずっと生きてくると、「もの」に依存する精神構造、生活習慣、全部そういうふうになつてしまします。従つて、そこから一度離れるということとをどういうふうにやつたらできるのかというのが非常に大きな課題だと思っています。

山本 視覚というものが非常に大きな影響を与えるという意味からしますと、ともかく「もの」が目の前にあるからいけないんですね。あるから影響される。その意味では「もの」をなくすればよいことになりますが、そこに現在の経済体制が許さない事情が出てきます。だから現在の経済社会という問題がどうしても絡んでくると思うんですね。どうしても「もの」をたくさん生産しなければ経済活動は維持できない、どんどん目の前に置かれてしまう。この辺の矛盾を乗り越える方法として何が考えられますか。

小原 つまりそうなると我慢しなくちゃあならないんですものね。無ければ我慢ということはないんですが、ただ一つはつきりしている点は、なぜ自然保護が必要かということの二つの中には、やっぱり自然自身に接して、

山の素晴らしさみたいなものとか、動物の美しさ、すばらしさというものに多少でも接触すると、「もの」と比較した時に、これを買いたいけれども買うのをやめてこの次の日曜日に山へ行こうというふうになり得るわけでしょう。

ところが今の状況で自然がどんどん少なくなつて、次第に子供のうちから接触することがなくなると、選択をする幅がますます狭くなつて、「もの」として存在するものの中のどれかと言うことだけが選択枝になつてしまふ。その意味でやはり身近なところに自然ということが、非常に遠いようだけれども、意外に大事なことだという気がしています。

山本 そうしますと、自然が失われることの意味は、失われることによって人間に意識されることさえもなくなつてしまふところに大きな問題があることにもなりまふね。

日本社会の問題点

山本 社会という場合、たとえば日本と欧米とか北欧

とか、アフリカとかアジアとか、それぞれの社会があるわけですが、それぞれの社会に応じて考えなければならぬ問題があると思われまふ。この中で日本はある意味では特殊な社会であるかも知れませんが、この日本の中で現在のような状況を作りだした原因として、何が一番大きいと思われまふか。

岡島 日本では一番大きいのはやっぱり様々な要因があるけれども、受験勉強による影響が大きいのではないのでしょうか。受験勉強というのは一つの核ですけど、それを作り出すムードというのがあるわけです。それは何かといえば立身出世かもしれないけれども、いい生活をしたという、これは飢餓感ですね。たとえば北欧とか、これは豊かさとか関係するのかもしれないけれども、ある程度いったところは民度が高いわけですよ。自分の生活をきちつとやった方が十何時間働いて偉くなるよりもいいんだ、ということが自分で判断できるようになつていくわけですよ。

ところが日本の場合はまだまだ戦争で焼け野原になつた後、必死になつて生きてきた影響が残っている。

日曜日にも休まないで働いたり、夜中まで働く、こういうのは異常な時、国が壊れた時にやっている話で、それはもう必要ない。にもかかわらず懸命に働き続けている。だから私は企業には、今ある労働時間を時短にしてやめろというんじゃないで、まともな社会に戻せ、夕方にはお父さんを迎えに駅に行くような社会に戻せ、と言っているんです。

日本でも江戸時代とか、明治・大正・昭和のはじめぐらいまではかなり精神的にも非常に豊かな、非常に落ち着いたいい生活だったと思う。それが明治の時に仏教をみんな壊したりとか、戦争が終わつてから何から何まで英語で勝負しなくては学会でも何もできないというような感じになつてきた。一種の異常事態が作った風潮だと思ふんですね。その名残りの最たるものは受験勉強だと思ふ。勉強していいところへ行かないと将来いいところへ就職できないという飢餓感でしょう。そんなことはないんですね。中学を卒業して板前さんになつたつていいわけなんだけれども、そういう自分自身が選べなくなつてしまつていような社会全体の風潮がある。その中

に全員が巻き込まれているわけです。

運動で言えば日本は100メートルランナーなんですね。ただ前を向いて走っているだけなんです。たとえばそれがラグビーやサッカーみたいにチームプレーとして、今ボールがどこにいて、全体の試合展開を各プレーヤーが分かっている、球はあそこにいるから私の役目はここであって、ここへ走っていけばいいんだという、全体構造がそれぞれのプレーヤーが分かっているという状況じゃないんですよ。だからともかく今の日本社会は真っ直ぐ走ることしか知らない。こういう日本社会の特殊性を認識しないといけないところが、国際社会との歪みも出てくる原因だと思いますね。

一番いいのは、昭和の初めぐらいまでにちょっと考え方を戻して、やはりお父さんは五時に終わって家に帰るんですよ。それで縁側で近所の人と将棋を指すわけですよ。こういう生活を日本人は本当に忘れてるんですよ。これをするためには精神的に高めなきゃいけないんですよ。それは教育だと思うんですけど、今は高めるどころか、ますます低めるような方向に向かっている。欲望

だつてどんどん低俗に向かっているでしょう。釣りに行っても数を競つてみたり、釣り師じゃなくて漁師になっているわけですよ。

南北問題

山本 環境問題を考える際避けて通れないのが、南北問題だと思います。南北問題の解消をどのようなところから始めるか、これは大きな課題だと思いますが、具体的なところから話していただけたらと思います。

小原 今一番心配しているのは東アジアなんですよ。

岡島 日本の悪いところばかりやっていますね。韓国、台湾などは日本のひどい水俣病とか四日市とか、ああいう失敗を参考にしていない。日本政府もようやくこの頃日本の経験として諸外国に我が国の政策は失敗したということを確認して、その失敗を参考に下さいということを出したわけですが、彼らがやっていることは悲しいかな、日本の一九五〇、六〇、七〇年代あたりと同じことを繰り返しているんですよ。このへんはそれを利用して日本も責任があるから何らかの形で、相手

国の方にそういう動きが出たら助けるべきでしょうね。内政干渉だとか、いろいろな声が出てくるとは思いますが、そこにNGOの大きな役割があるんですよ。

政府と政府、国と国とで政策をやる時に、お前たちこれをやれというのは内政干渉になる。ところが相手国の中のNGOがおかしいと言った時に、こちらのNGOが支援できる、そうするとバランスがとれるわけですね。一方的じゃなくなる、そういうことでNGOの役割が出てくると思うんです。

小原 人口も多いですしね、なかなか大変だと思いますよ。

岡島 そうですね。とにかく世界の人口は五十五億でしょう。基本的人権とか人間一人一人の命とか考えて、現在の経済体制、政治体制を見直さなければなりません。とにかく現在の体制は南の国に不利にできていますよ。このへんのところを少し変えていかなければいけないと思いますね。

完全な自由経済というのは今の社会にあり得るかということがありますね。たとえばガット・ウルグアイ・ラ

ウンドということでは完全に自由貿易を目指していますね。しかしあれは富める国同士の話なんです。ですから本当に貧乏なバングラデシュと日本と自由貿易といつても、日本が勝つに決まっているわけでしょう。

そういう場合、安全保障という意味でやってもいいんですけど、ハンディキャップ制度を採用するべきだと思います。そうすると一緒に競えるじゃないですか。何かそういう制度を設けないと差は開くばかりですね。差が縮まらないことによって世界がアン・サステイナブルということになるわけですよ。南と北の経済格差はでるだけ早く縮める、格差をなくしていくというのが環境を守る上では大命題なんですね。だからそのところは地球環境という点から考えても一番大事なことじゃないかと思うんですね。

山本 ハンディキャップを考えるうえで必要なものは、意識として、いわゆる途上国の人たちを思いやるような心、人間としての平等性というようなもの、こういったものが本当に定着するかどうかということが次の大きな課題だと思います。先ほどの話からすれば結

局今の子供たちを見ていても受験競争とか、競争原理の中で生きているわけですね。競争原理というのはつまりほとんどん職落としてゆく原理ですね。人が転んだら喜び、どちらかというところから決して平等性や公平性という。だからそういうところから決して平等性や公平性というような発想は出てこないと思うんです。

岡島 日本人には今、出て来ない。

小原 だから意外に価値観が多様じゃないんですね。多様性だ、個性的だ、と言っているけれども、みんな同じでしょう。だからそのへんは難しいと思いますね。

先進国の既得権

山本 平等性や公平性といった意識の問題が簡単にクリアーできないとすれば、どの辺から具体的に始めるか、と言うことになるかと思いますが。

小原 一つ考えなければいけない点は、今までは自然は日本人の観念の中ではタダだったというのが非常に強くあるんです。海の幸、山の幸でね。だから自然物はタダだから採れるだけ採るみたいに思っていたんだけど

も、地球上はもうそういう状況じゃないということを知ったとすれば、途上国の野性的な自然そのものをやっばり我々がお金を払って守らなければいけない。地球の用料ですね、その観念をやはり先進国が持つ必要があると思うんですよ。それは企業なんかにとってはなおのこととそうで、ある種の地球上の安全保障ですね。

岡島 日本は最たる例なんだけれど、世界中の富をお金で掻き集めてきているわけでしょう。それでつくりかえて高くして売っているわけだから、それだけではもうそろそろいけないんですよ。だから応分のお金を世界に戻さなければいけなくなってきている。

もう一つは一次産品というのは世界中でものすごく安いわけですよ。それは経済的ないろんな仕組みがあるんでしょうけれど、いずれにしろ先進諸国が既得権の上にあらをかけたやり方で、今まで通りにやったら先進諸国だけは栄えるけれども、あとは食いつぶされますよというのには明らかですね。それでよければ自らの足を食う形で南を痛め、最後は自分も食ってしまうというやり方をするのか、もうやめて自らの足腰をきちつとする

ようにするのか、それが環境の方から問われているという状況じゃないですか。

小原 難民が結局そうですね。とにかく人口比からいくと圧倒的に開発途上国の方が多いいわけですから、それがいわゆる経済難民みたいになる。その一方で人権意識はそれぞれ次第に強まってくる。したがって、ここ数十年の間にその連中が押し寄せて来て、経済基盤として今までと同じようにできなくなることは明らかですね。そのへんで今言われたように、何かしなければいけないということが突きつけられていることは事実ですね。

岡島 最初にやらなければならぬことは、先進国の既得権というものをもう一度見直すことだと思うんですね。これは新大陸を発見した五百年前の時代、白人が世界に出ていった時から始まっているわけです。日本は幸せなことに国全体の自然がものすごく豊かですから、これで何とか欧米に対抗してきたけど、世界で対抗できているのは日本ぐらいのものです。あと独立を保ったというのはタイとかいくつかありますけど、新大陸なんか全部白人に食われちゃったわけです。アメリカ人やオー

ストラリア人になったわけですよ、だから世界中で対抗したのは日本ぐらいのものです。中国がこれから立ち上がってくるかもしれないけど、いずれにしろそういう状況というのが世界にあって、その上に立った南北格差があるんですよ。だからそのへんのところをよく考えて、日本あたりが率先して、もうちょっと既得権を譲ったらどうかということを言うべきだと思うんです。

小原 非常にいい意見ですね。カラードの側に立ってね。さっきの話だと、世界の新しい新秩序の中には、さっき言われた五百年のツケというのがあって、要求は必ず出てきますね。今インディアンの人たちが、五百年のコンプスの問題で先住民の権利みたいなものを言っているのを見ますと、これから先既得権の問題が出てくる可能性は多分にありますね。世界に進出しようというのは、考えなければいけない時代に来ていることははっきりしていますね。

山本 結局、既得権というものを先進国が破棄して、一度対等な立場に立つたうえで南北格差というものをいかに縮めるかと言うことですね。次に問題になるのは、

そのうえで今度は最初のところで出てきた、開発途上国における富の平等性と言ったところでしょうか。

岡島 そうですね。多くの人が南の人間は怠け者で馬鹿だと言ってるけれど、そうではないですね。僕が思うのは、南米へ行ってもアフリカへ行っても、インドの山奥へ行っても貧乏人は一生懸命働いているんです。朝から晩まで働いているんです。だけど搾取があつて、富の公平な分配がないわけです。これは怠け者でも何でもないんです。ただ貧乏人に金が行かない仕組みになっている。一部の大金持ちが全部金を集めて、貧乏人を従えているだけの話で、本当に気の毒になりますね。結局地球サミットの後の最大の課題は環境問題だけれども、実は南北問題ということじゃないでしょうかね。もちろん人口問題も含めてですよ。

山本 これまで話してきたことは主に政府レベルでの対応という色彩が強いと思いますが、南北問題に対してNGOとして、何か対応できるようなところはあるのでしょうか。あるいは問題点でもよいのですが。

小原 NGOは南北問題について言えば、既得権の問

岡島 強いて言えば北欧とかの少数民族、そういう国は五百万人とか六百万人でしよう。しかも豊かだから、少なくともそういうところは多数派になってきつつあるようです。

小原 そうですね。オランダとか、結構そういうところはかなり強いですね。それからヨーロッパの中でドイツが最近是比较的強くなりましたね。

岡島 そうですね。ドイツは強くなりましたね。ドイツなんかは半分ぐらいそういう感じではないでしょうかね。非常に強くなっている。ドイツは主要政党が全部緑の党の政策を取り入れちゃったでしょう。だから緑の党はつぶれちゃいましたね。だから緑の党は松明を持って走ったんですが、今ではもういらなくなったわけです。ドイツの既成政党というのはすごいなと思いますね。ほとんど取り入れている。それに比べて日本の政党はどれも全然駄目ですよ。

環境問題に対する意識の涵養

山本 ドイツを始めとする欧米では自然保護といった

題や富の公平分配と言ったような問題というのは早くから主張しています。ただ問題は、同じNGOの中でも欧米のNGOというのはそういう問題に対しての受け答えというのが必ずしも十二分ではないと思えると思うんです。欧米のNGOの人たちはもちろんこういうことについて分かっているんです。だけどそれを政府が選んだり働きかけていく時、やっぱりどうしても具体的な対案を選ばせるほどの力がない。アメリカのNGOと言えどもないと思います。けれども現在までのところ、開発を進めて行く場合に少なくとも委員会等で開発途上国について考えなければいけないというふうにしてきたのは、NGOの力だと思っています。

岡島 アメリカの場合でも環境保護運動というと日本なんか比べて圧倒的に力も強いけれども、国全体の中で環境保護運動が占める力というところ、やっぱりまだ弱い。世界では比較的発達しているのかもしれないけれども、世界全体から見るとまだまだ少数派ですね。

小原 おっしゃる通りです。まだ多数派にはなれないですね。

ような意識をみんながもつというような土壌があるんですね。しかしどのようなものがそうした意識を醸成するのでしょうか。

小原 一つ考えられることは、やはり人々が基本的に真面目なんだと思うんです。だから日本の不真面目さみたいなものと明らかに違っている。

岡島 私はキリスト教だと思いますよ。日本は仏教がだらしないからいけないんです。仏教の坊さんが金儲けに走っているから。これが日本では諸悪の根源ですよ。だってキリスト教は痩せても枯れてもちゃんとミサとかやっているわけですよ。一般の人が日曜日になりに行きますもの。

山本 それは聖職者としての役割をきちんと果たしていると言うことでしょうか。

岡島 そうですね。それでいて日本の坊さんは結構偉そうにしているじゃないですか。日本の聖職者は本当に考えてもらいたいですね。これは規律というか、気持ちを堕落させています。

山本 たとえば今の学生の話聞いていますと、真面

目な話をすぐに避ける傾向が見られます。これも日本社会の不真面目さによるものですか。

岡島 聖職者が怠けているんですよ。だから何となく国全体を覆っている空気がよどむ。ちよつとピリッとした空気はどこにもないんですね。冬の朝、起きるとピリッとするじゃないですか。寒いけれども気持ちいい、そういう雰囲気グドイツなんかにはどこに残っている、やっぱりキリスト教みたいなものを中心として。

日本では宗教というのは無宗教みたいなものになってしまっている。神道もあれば仏教もあって、キリスト教もありますけど、何といったって大多数の冠婚葬祭をとりしきっている仏教界が、ピリッとした雰囲気はどこかで出していかなければいけないと思いますよ。

小原 キリスト教圏と言っても多少民族性みたいなものはあると思います。観光客を見ていますと、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人、北欧の人々がモラルとしても真面目だけど、イタリア人、フランス人、スペイン人というのは全然駄目だったりする。日本人も環境についてのモラルという点では全くだめですね。どうもそういう

から海面が一メートルも上がったなら国がなくなっちゃうという危機感もある。それから北海でアザラシがいつぱい死ぬとか、ライン川が各国を流れて汚れてしまっている。

アメリカにも酸性雨があるし、オゾン層が壊れている。カナダでは一昔前の日本の光化学スモッグ注意報のような、オゾン層が薄くなっている注意報が出ているわけです。同じぐらいのオゾン層が減っても、肌や目の強い日本人は平気でも、白人は皮膚癌になりやすいということも関係していて、オゾン層の破壊問題に真剣にならざるを得ない。このように結構目の前に地球環境の未来を暗澹とさせる現象が見えているんです。だから本気になれるわけです。

小原 それともう一つは報道の姿勢が違うんですよ。イギリスのテレビ局の4チャンネルだかは朝から晩まで環境問題をやっている程でしょう。ドイツもそうらしい。私がかナダへ行ったら、ちよつとテレビを捻れば必ず野生動物の話とか自然の話が出てくる。一九六〇年代から七〇年代にかけて、それをバッチリやってくれたということで、国際自然保護連合(IUCN)が報道機関に対

意味で言うドイツ人等の真面目さみたいなものは、一度環境破壊の問題があるなんていうとワッと広がるくらいにでますよ。だからイギリスでもコンシューマーショップなんていうと、ちゃんと包装紙をなくせなんていうことになれば、ワーとそうやる。日本ではなかなかうまくいかないでしょう。

岡島 もう一つは、要するに地球環境問題と言われていた大きな問題、人口問題とか原子力は別として、オゾン層の破壊とか温暖化とか、大きな問題が日本には一つもないんですよ。これが今一つ日本人が真面目になれない要因になっているとも考えられる。ところがヨーロッパには酸性雨がまずあるでしょう。東ドイツやチェコの森がかなり枯れている。影響を受けているのはドイツは五〇%ぐらいという数字があります。ということは我々通勤電車で丹沢の山並みなんかを見て半分枯れているというような状況を想像すればいいわけです。庭にせつかく植えた木が半分枯れてしまっているというような状況になれば誰でもこれはまずいと気がつくんですね。温暖化に関連して言えば、オランダは埋め立てで作った国だ

して感謝を表明しているぐらいです。

岡島 ジャーナリズムとか報道を十把一からげでみんなマスコミと言うんですが、日本の特徴はやっぱり新聞主導型なんですよ。ところがテレビのジャーナリズムの姿勢が欧米と比べると非常に遅れていると思うんです。社会問題への取り組み方がね。テレビがスポーツ新聞的な取り組み方でしょう。

たとえば日本ではNHKの教育テレビに相当するものが、アメリカではPBSという教育テレビがあって、そこが環境問題をきちんととらえて一日に十何時間やるわけですね。それに比べ日本でのテレビの環境報道の未発達ぶりというのがかなり真剣な問題だと思っんですね。アメリカでは新聞よりテレビの方が影響力は大きいでしょう。ABC放送やCBSのアンカーマンという方が新聞社の社説の主筆より有名だし、彼らの影響力が大きいわけですよ。テレビというのがそれだけ社会的信用があるわけですね。

山本 結局日本のテレビを始めとするマスコミ機関に報道の自由は主張するけれども、その一方で報道機関と

しての社会的な役割を果たしていない、つまりそこにポリシーがないということです。

岡島 そうですね。特に民放の問題でしょうね。新聞にもいろいろ批判はありますが、やっぱりものごとを判断される時には、小原先生の言われるように人間は視覚の方が強いわけだし、環境報道は新聞よりテレビに適している。テレビがもうちょっと、アメリカ、欧米並みの世論リードができるようになればいいと思うんですね。いずれにしろ一番人間の視覚に訴え、総合的に音と視覚と言葉で訴えているテレビがふざけすぎているというのがかなり大きいと思いますね。

生物保護問題

山本 それでは話を変えまして生物保護の問題に移っていききたいと思います。まず、実態の方から少し話していただければと思います。

小原 地球上からいろんな野生の動物や植物が消えていく。これは一つは生命の尊厳性からの問題もあります。が、大事なことは自然というのはそういう野生の動物や

植物で構成されているからその喪失は自然破壊になるということです。だから一つの種類の動物を動物園の中で生かしているからといって、その種類の動物が絶滅しないというだけではないんです。その野生の種の個体群が抜けたら、その自然はもう自然じゃないと言うことなんですね。ところが、毛皮にしても、皮革にしてもせいぜい何千の単位で輸入しているのかと思っていたら、南米あたりから、一度にワニ皮七〇万枚などと言う単位で輸入されている。したがって七〇万匹のワニが全部殺されて皮をはがれているわけですね。こういうことをやっていたら、明らかに自然はもたないですよ。それはもう今や漁業でも何でもみんなそういう状況になっている。それは自分達が食べるだけだったら本当に僅かで済むものが、とにかくそうじゃない状況をどんどん作り出してしまっているから、世界中から野生の動物や植物が今の状況だったら消えていくでしょう。色々計算の仕方はありますが、このままだと二〇〇〇年の終わり、二十一世紀に入ったら一〇%以上、何十万、何百万種が絶滅し、今までの自然の絶滅のスピードに比べて二万五

千倍のスピードになるとも言われています。そういう状況が地球上全体に広がっています。

ところが、先程来出ていましたマスコミの報道姿勢の違いといった問題があつて、野生の動物や植物がいかに大事だということをいくら訴えても、まだまだ日本の場合には浸透してない。しかし世界各国は今の酸性雨のことと同じように、動物や植物が絶滅してくるということは、自分たちの地球環境の危機だということはみんな知っているんですね。今のスピードのままでいくと地球の自然自身が破壊されますから、そうすると全ての一次産品の基礎になっている光合成等のバランスシートが全部壊れてくるということというのは産業界自身もよく知っていて、危機だと思っています。その時に一番大きいのは、地域の住民の人がシマウマを殺して肉をとって食べるぐらいのことで自然界が壊れるなんてことは絶対にならないわけですから、問題はやっぱりそこから先の商業トレードの問題とか、それからもう一つはやはり押し寄せ

る乱開発で、特に開発途上国の場合にはちゃんとした開発が、農業にしても牧畜にしてもできていませんから、そのために植民地経済のやり方の後遺症でバランスが崩れた状態の農業が砂漠化を生んでいるというようなことになって、両方から野生動物というのがせめつけられているという状況になっています。

山本 しかし途上国においては、経済を維持するうえでは結局自然資源しかない。そうすると現在のところそれを売って経済的にやっていくしかないわけですね。そのところは今後も含めてどのように考えていったらよいのか。

小原 その場合には、出せる場所というのがちゃんとあるんですよ。つまり出せる場所というのは、もう少し地球上全体の地域割りができれば、つまり自然のままの進化に任せられるところと、動物や植物を実際に利用できるところと、農業をやるところと、それから都市というふうな、開発途上国はそういうふうな今の段階なら分けられるんです。捕れるところではサステイナブルな状態にして、ワニの場合で言えば、卵のうちにとらないとか、子供のうちに捕らないとかいうやり方をしていけば、それは十分に成り立つわけです。また、そういうも

のをもつと高く値段をつけてもいいわけです。その意味ではアフリカとか中南米というところでは、まだ間に合います。これがあと二十年から三十年、今のような状態が続いたら、もう間に合わないと思う。そこがバイオダイバスティ保全の条約の中の非常に大きなポイントだったわけです。ところが今回の地球サミットではそれがバイテクのいわゆる知的所有権の闘争になってしまったところがある。

NGOの側ではアジェンダ21で今言ったようなことをちゃんとやれ、ということをやっています。それからNGOの側のアジェンダにもそういうことは書いてあるんです。大事なことは地域の自然の特色と文化の多様性や人間の精神とは一致しているわけですから、そういうものを失うと世界中がみんな同じようにコントロールされたような世界になってしまう。したがって、アフリカならアフリカの土着の地域、特色ある自然の生態系というのを全部残せということを、あのバイオダイバスティの条約の最初はどうやって条約で具体化していたんですよ。しかしまだ序文のところには一応は今言ったような理念は

ある。これとは反対に、ここここは大事だと言われたところは、言われて喜ぶようにならないければ駄目なんです。それは政策論ですね。これからは地球全体の自然運営論というか、管理論、マネージメントする必要があります。そして、誰もが納得できるようなやり方をする。

私も小原先生と同意見なんですけど、一番は一次産品の単価を上げることだと思いますよ。まず木材なんか三倍にしてちょうだいと思うんです。その時に一番困るのはコンシューマー、消費者ですよ。一つの寓話として聞いて欲しいんですが、まず三倍にしない。三倍にすると木は三分一切つても値段は三倍だから途上国は同じ金が入る。伐り方が減る。それから日本へ入ってくると熱帯木材が三倍になると、日本の林業は息を吹きかえす。そして日本の林業がどんどんいい木を作れる。それからもう一つ、コンシューマーの方で高くていいものだけしか買わなくなる。だから机は一個一万円とか五万円じゃなくて、机というのは一生ものです、机を買ったら百万円、ちゃんとした机というのは車より高い、そういうものを買えばゴミがなくなる。だからいろんな意味で木材三

書いてあるんですよ。

岡島 日本でも同じ様な問題が出ています。今日本でも自然を持つところは、自然の持ち損なわけですよ。だから古い文化財の家を持っているのと同じで、持たないで壊してゴルフ場にしちゃった方が儲かるわけですよ。そこで自然の持ち損ということを考え直す。そのためには日本国全体を考えた基本計画を考えなければならぬ。

世界の問題で言えば、たとえばボルネオの木であれば、一年間に何万ヘクタール伐るのであればであればずっと使えるか、その限度があると思う。ボルネオの人が木を全部伐って、たとえば東京みたいな都市にしたいと思うのに、それを環境のためにしないという決断をすれば、この人たちは地球上に利益を与えていると言うことで、開発しないための免税だとか特典を地球上全体から貰う権利があるわけです。

開発しなくても、したと同じだけのメリットがないと自然を壊してしまうことは避けられない。だからそのメリットを開発しないでくれと言っている側が払う必要が

倍価格論なんて言ってるんですけどね。それと同じで動物だって簡単にサファリパークなんて作れないぐらい高いものにして、ライオンも日本で数頭ぐらいしかない程珍しいものでいいんですよ。

小原 ケニアとかタンザニアなんかでは、先程言ったように自然の進化のままに任せておく、絶対に手をつけないところというのを作って、何をやるかというところ、みんながエコツーリズムでもってそこを見に行くということをやれば、経済的なメリットもある。だからそういうシステムみたいなものが世界の中に出来上がってくると、これは世の中ずいぶん別の意味で良くなりますよ。岡島さんの木材三倍論は非常に面白い話だと思えますけどね。そういう点で熱帯や開発途上国というのは実は今のままだったら、まだ間に合う。

山本 昨年の台風で大分の森林が相当大きな被害をこうみましたね。人工林にもかかわらず、結局手入れしてないからもやしまいたいな木になって倒れてしまう。結局輸入材の方が安いから手入れをしないんですね。

岡島 だから日本の林業がいいものができてないでし

よう。もう間もなくだと思いますが、木が倒れておそろしく洪水が増えたり、いろいろ起こると思いますね。日本の政府は木や自然はタダだと思っている。それが大きな間違いですよ。

小原 非常に大事なものは、管理主義で全部何でもかんでもとることばかりになってしまっているのではなくて、マネージメントによって自然のままにしておくところというののも一つの管理なんですよ。そういうふうには自然のままにするように人間の欲望をそことところでコントロールした上でやらないといけないですね。

それから日本の場合であれば、人工林が大部分で、原生林のところというのはほんの僅かですけど、そこは手をつけるべきでない。ところが今はそういう計画性がメチャメチャです。いわば国家百年の計というのを本当に考えてくれる人がいなくなっていますよ。昔の人は保守的だったかもしれないけど、国家百年の計なんていう、本当にそういう政治家がいたんですけど、どうも今はあやしい、三年ぐらいの計のような気がしますね。

岡島 地球全体を考える政治家というのが欲しいところ

です。だから領海内の鯨をとりたいたいというのがそれぞれの国の国民世論でそうなるなら、私は捕ってもいいんじゃないかと言っているんです。

最初のストックホルムの会議の時に出たのは、そういうポリシーだったんです。ところが、日本がとにかく二十年間にわたって、それはおかしい、とずっとやってきたために、この問題になったら感情的になって、結局やめる、とか、野蠻だ、みたいな話になってしまっているわけです。だから食文化の場合でもエスキモーにしても、それからアフリカでもシマウマなりの野生動物をとって食べるところ、自家消費ならばどの国でもそれを禁止してないんです。

だから日本でも自家消費の範囲内でとりたいというふうにして、とにかく地球上全体の環境保全からいくと、南氷洋といった公海から手を引くというふうに早くやっちゃえば問題は簡単に解決したと思う。私は今でも間に合うんじゃないかと思っていますよ。

もう一つ欧米と日本との違いがある、それは家畜と野生動物に対する感情のうけ方というのは違いますね。日

ろですね。日本人にはなかなか難しいかもしれませんがどね。今すぐ立ち上がっているんな手当てをしても、あと結果が出てくるのは十年後、二十年後でしょう。だけど今はまだあんまりやってないから、二十一世紀になってもどんなもつと悪くなる、非常に心配ですよ。

生物保護と文化

山本 もう一つの問題として、人間はいわゆる植物や動物を食べて生きていくしかない。その一つとして日本が特に問題視されている鯨の問題があります。しかしこのような問題は一方で食文化といったそれぞれの国の文化の問題がかかわってきて、一概に否定できない側面を持っていると思いますが、生物保護の問題との関係でどのように考え行か、これも避けて通れない問題だと思います。

小原 結局一番大きな問題は、鯨の場合に南氷洋というのは地球生態系としてさっきから言っているように自然の進化のままにしておいて、手をつけないで置いておくべきところというのをそのままにしろということなん

本の場合だったら、必ず出てくるのは野良猫なんか餌をやったりするのは美しい動物保護というふうになるんだけれども、あれは動物保護じゃない、本当の意味の野生動物保護じゃなくて、猫が増えたら他の野生動物はかえって猫にとられたりすることがあるわけですから、それはやっぱり区別しなければならぬ。だから必ずしもエコロジーの理解が日本の場合には十分じゃないから、そこでイギリスなんかとの違いが出てくる。食文化云々ではつきりしておかねばならないのは、自然を構成している野生動植物と人間がつくれる家畜作物とは環境保全上全く違うということです。

山本 そうしますと、鯨の問題は文化の違いと言うよりもむしろ日本の態度の問題と言うことですか。それと商業主義にのってとりすぎてしまうところの問題ですか。

小原 それと今の地球環境の状況というのに対して、七〇年代からずっと変わってきたんだということに対する認識が、日本の漁業関係者の中にはなかったわけですね。だからそここの食い違いが私は非常に大きい

と思う。

山本 森林保護にしても、日本の商社がどんどん買いついていくというのは、結局歯止めがきかないところがある。

小原 それが非常に大きな問題なんです。水産についても、この間北海道で公式報告の十五倍とか捕っていて、それを行政も黙認していたという話がありましたね。

岡島 鯨の問題に対して公海という話もありましたけど、私なんかはもう少し違って、南氷洋は捕ってはいけなけれども、公海での鯨を禁止したら他の漁業も全部駄目になるから、そう簡単にはいかないと思っています。これは文化の問題もからむと思います。例えば、仮に鯨がたくさん出てきた場合に、もう生態系も心配なくなるようになったとする。そうしたら捕ってもいいのか、と言う問題がある。これはイギリス人に多いと思いますが、少なくとも二割ぐらいの人は、それでも駄目だといえますよ。そういう特別な感情を抱いている人もかなりいますね。

しかしながら捕鯨反対の最も大きな原因は、過去の日

そして日本人の発言がまともな発言に受け取られるような土壌を作る必要がある。そうでないと国際社会にいつでも話にならないですよ。

小原 私は基本はこれまでの行きがかり上の課題は別とすれば、今の話でいいと思います。要するにどれだけの領域かということは別として、地球の中でどの海洋を自然のままにしておくか、これを作っておかないと駄目なんです。自分自身が魚を好きなこともあります、魚をとるなどというのは全然暴論だと思えます。しかし、今までのやり方だと確かに目茶苦茶なんです。稚魚を肥やしにしちゃうとか、捨てちゃうかというやり方をやるでしょう。そんなことをすれば魚そのものがいなくなるのは当然ですよ。

岡島 北洋漁業なんか無縁で釧路とか根室に帰ってくる途中、値崩れおこすようにだと、捕ったものを何万トンと捨てちゃうんですからね。あんなやり方をしているわけですよ。だから水産業界猛省の時期ですよ。

本の水産業界がやってきた悪の限りなんです。これに対する不信感が非常に強い。というのは今まで日本の水産庁が世界に嘘ばかり言ってきたわけで、それで底びきだかと、流し網だとかの漁法でとんでもない量の魚を捕っているわけです。これは日本の水産業界が猛省して切り換えないと、鯨がなくなっても鯖だとか、つぎつぎに問題になりますね。

それからもう一つ気をつけないといけないのは、日本人は二百海里は自分の海、その外へ行けば公海とされているでしょう。ところが今日本の水産業者がやっていることをよく見たら、公海といってもよその家の庭先で捕っているんですよ。それは誰だっていい気分はしないですよ。ロシアとアメリカのサケやマス問題は、日本人が取り過ぎるから問題になっているんです。今後の水産庁の最大の仕事は、鯨の枠をとることもさることながら、日本の水産業界の体質改善だと思います。要するに世界にまき散らした日本流のあこぎな態度を改めることです。

これらを改めることによって、国際的信用を獲得する。

環境倫理と宗教

山本 それぞれの文化の違いが現われてくるところに、自然をどのように捉えるかという問題があると思います。環境倫理としても重要な課題だと考えますが、どのようにお考えですか。

岡島 これはヨーロッパの人の方が先に気がついていきます。たとえば自然利用論、自然はあくまでも人間のためにあるんだという考えがあります。これは日本にもある。しかし自然は自然のためにあるのであって人間のためにあるのではない、というふうに考える立場、ここではむしろ人間も自然の一部であると考えています。これをキリスト教が前者で、仏教が後者だと単純に比較されていますけれども、私はそんな単純なものじゃないと思っています。

確かに過去二百年ぐらい、キリスト教の人たちが聖書の「産めよ、増えよ、地に満ちよ（創世紀1―28）」、というようにところをとって、人間は自然を自由に使っているんだ、と解釈した。アメリカ開拓の歴史はまさにそ

ういう歴史ですね。原始の森を切り開いて文明の光を与えるのは神の啓示だと、これがピューリタンの一つの論拠でしょう。

ところが環境問題を通じてこの考え方は聖書の解釈違いだったんじゃないかと、気がついてきたわけですよ。その一方で仏教はどちらかというと自然と共に、人間は自然の中の一部であるということをやってきたんだけれども、この百年ぐらいの間にみんな忘れちゃっているわけです。だから現在の姿を冷静に見ると、かえってヨーロッパの人たちの方で環境倫理学が発達しているんじゃないか、と思わざるを得ない。本来土壌としては我々日本人とか東洋人がもっていたはずのものを忘れちゃって、すっかり環境倫理学がすたれているんじゃないかという気もするんですね。

山本 東洋というか、日本というのは自然が豊かですから、その中で甘えている。その意味では自然というものを認識する契機が乏しい。それに対して砂漠の思想と言われているキリスト教では自然が非常に厳しいものだから、むしろ自然というものの恩恵も厳しさも両方知っ

ているところがあると思う。そのためにかえって倫理観が発達するというようにもいえる。

岡島 そのとおりだと思います。東洋では人間は自然の一部なんですね。まさに母なる自然だと思うんです。だけどヨーロッパとか北の方の国とか、砂漠の国はかなり一生懸命働かないと食っていけないというような、自然はある意味では敵だったかもしれないですね。

山本 これはキリスト教を背景にした西洋の文化と東洋の文化との違いが出てきていると思います。世界には様々な文化が存在するわけですが、今後はこの違いを強調するだけではなく、何らかの歩み寄りなり行動が必要とされると思います。

岡島 キリスト教と仏教を比較して、仏教の方が本来自然にいいとか、またアイヌとかインディアンのやつていることを見て勉強するということはいいことなんだけれども、それを絶対だというふうに考えてしまう人がいます。むしろ私は、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、また仏教やアフリカの呪術的な宗教もアニミズムも、みんな一回集まって来て、ともかくこの全体の地球の中で

みんなで食っていかなければいけないんだ、その倫理観というのを一回たいてみようじゃないか、という時代に来ていると思うんです。

どれが一番いいというのではなくて、それぞれの風土も違うし、適材適所という観点から考えてみたらどうか。それは文化の多様性や宗教も含めて、特に倫理面をたたかないといけないと思います。自然と仲良く、共生と行うことで、総論は賛成になりますよ。しかし豚は食わないとか、チベット人は魚を食べないとか、そうなるべくとまた喧嘩になるから、そういうところで小原先生がおっしゃったように具体的にどここの地域のもものは保存しておこうとか、一年間に熊を世界中で百頭ぐらいは食ってもいいだろうとか、そろそろそういう世界的な視点から考えなければならぬ時期に来ているんだと思います。

山本 長時間ありがとうございました。

(おばら ひでお・女子栄養大学教授)

(おかじま しげゆき・読売新聞解説部次長)

(やまもと しゅういち・創価大学助教授)